

あるから、姑らく琴臺の故事を學んで深くは論ぜずに置から。

因に云ふ。氏が畫家以外に一種の紀行文家として低からぬ地位を占めて居られた一事も、予の敬服した一つである。

門外漢たる予にしては思はず絮説に過ぎたかも知れぬ。しかしこれ氏の葬列に臨み得なかつた予が、一片追慕の至情から出た永別の辭である、誄辭である。

## コスモス咲く頃

織 田 一 磨

夏の強い、色彩から漸く遠ざかつて、やゝ涼しい、頃になると、自然は、何となく寂寥の感じが加はつて、春の季節とは全く、反對の現象になる、春は、冬の長い間の沈黙の後をうけて、華やかになるが、秋は夏の強い色彩が、段々と褪せて、冬の暗い沈黙に、再び歸る仕度であるから、自然も従つて何とはなく、物悲しい感じに満ちて來る、春の季節が、若い女のような、華やかな淋しさなら、秋は老人の悲しさと云つたような調子であらう。東京の町端れに、背の高いコスモスの花が、ピンク色や、白に咲き出すのも、此頃である、朱い燃える様な、ダリアの花に、どことなく寂しさが感じられるのも、此頃である。

そうして、ちようどコスモスの、咲き出す頃は、灰色の肌寒い日が、毎日々々續いて、人々の腦裏に、一種の哀愁を起さすのも、此頃である、元來自分は、靜な自然が好きで、秋の曇り日は、其内でも殊に好きである、甲高い百舌鳥の聲の、透る空も、赤蜻蛉の翅に、白く露の玉が置かれて、朝の光線が、キラ／＼と露のむねに光るのも面白い、黄色い花の咲く雑草の姿や、總べて秋の印象は一ツとして、自分の氣分にさからうものがない、全く佳く、調和されて居ると思ふ、四季の内、春も靜かであるし、冬も動いては居ないが、春や冬の、自然には秋の



ように、淡い悲しみが無いと思ふ、

いや全く無いのではなく、感じ方が異ふのであらう、例へば、春のは矛盾の悲し味とすれば、冬のは、壓迫の悲しきとでもいふのであらう、ところが、秋の悲しきは、そう云ふのと異つて、只何とはなしに、物悲しいのである、西行法師の歌の通り、「心なき身にも哀れは知られけり、鳴立澤の秋の夕暮」とでもいッたような、悲し味である、自分一人の感情からみれば、コスモスの花にも、此の歌の感じは充分にあると思ふ。

尤も自分には、このコスモスの咲く頃になると、思出が澤山ある、或はそんな、思出が原因となつて、秋と云ふ季節が、悲しくなつたのかも知れない、自分が小供の時、母の死んだのもやはり、この季節で、其時に自分の家の園には、一面にコスモスが咲き亂れて居た、母は長の病氣に、細く瘦たせ躰を起しては、コスモスの花を觀た、母は其纖弱な、花を愛して居て、毎年咲くのを樂みにして居たようであつた、自分は未だ小供で、其時代は何にも氣に掛けないで過ぎたが、母が死んでから、コスモスを觀る度に、淋しい心持になるので、覺えていゝる、これが、自分のコスモスに對して、思出の始めであらう。

其後、自分は繪筆を持ツて、一生を藝術に送る可く、東都に出て半生の、奮闘的生活に入ツたのも、コスモスの頃であつた、大阪を出た自分は、先づ赤阪の或る下宿に、起伏をして居た、その折り隣りの庭に、コスモスが咲いて居て、雨の日や夕暮れの空に、淡い花の影を眺めて、一種の哀愁を覺えた。こんな印象が、毎年コスモスの咲き出す頃になると、新しく自分の腦裏を往來する、秋と云ふ季節には、何物よりもこの花の聯想が、一番強くなつた。

今年はや、又、コスモスの思出が新しく加はつた、其れは、大下氏の突然の死である、毎年、氏の死に就て悲しい思出が、自分の胸に浮みだすのも、必ずコスモスの頃であらう、殊に、同じ藝術に遊ぶ人の死は、他の何人の死よりも、強く又深く、自分の胸に感動を與へて居る。

死と云ふ自然の運命が、何故に悲しいのであらうか、其れは殘された悲し味と、有物を、無くした悲しきと



同時に來る悲しさである、併し、死んで行く人の心は、むしろ苦しい現實に、生るよりも死の幸福に、就く方がいゝかも知れない。瞬間の歡樂に憧れて強い刺激を求めつゝ生きて居る我等が、心の裡の淋しさを想ふたなら、自然の死は、むしろ樂かも知れない、大下氏の死を聽くと同時に、こんな感想が自分の胸の奥に浮みだした。

あゝ自分が死の命を、自然から受けるのは、此後何年の後であるだらう、其れ迄には、何度コスモスが咲いて、冬が來るだらう、毎年々々、自分のコスモスに對する思出は、多くなればと云つて、減じることはないだらう。

ことしも自分の庭には、ピンク色や、白のコスモスが、咲き亂れて、小形の蝶が、遊ぶで居る、灰色の日が毎日々々續いて、汽車や電車の、來ては過ぎ、過ぎ去つては、又來ると、自分の心の淋しさと、妙な對照を示して居る、自然は今、紅や黄色の、華かな色彩に、瞬間の歡樂をゆめみて、再び沈黙の、暗い冬の季節に入るのであらう。

(十月二十二日大阪に於て稿)

### 余の眼を惹きたる水彩の小品

山 縣 五 十 雄

數年前、余が猶ほ萬朝報記者なりし間、上野に開かれた或洋畫展覽會を見に行つた時に、其處に出品せられた數多き畫幅のうちに、特に余の眼を惹きつけた二三の水彩の小品があつた、其取材の穩かにして、高尚なる其運筆の自然にしておとなしき、其色彩の美しくして脱俗なる、いづれも歎美に値へあるものがあつたが、とり分けて余を感服せしめた點は、此等の畫が、いづれも清新の氣と溫雅なる風とを帶びて、觀る人の心を温ため、おだやかにして、且つ湧然として美の感念を起さしむる事であつた。余はそれ等の畫を、此意味の